

五輪会場にも決定の《むさしのフロント》
「私が暮らしつつづけたいまち」へ節目のW慶事に沸き立つ
《むさしのフロント》

朝霞市内には東武東上線・朝霞駅および朝霞台駅、さらに朝霞台駅に隣接するJR武蔵野線・北朝霞駅と3つの鉄道駅がある。このうち東京都心部から朝霞市に向かう際の交通手段として、最も便利がいいのは東武東上線・池袋駅〜朝霞駅のルートで、所要時間はわずか18分だ。

この東上線で池袋から朝霞に向かうと、東京都と埼玉県の境にあたる成増駅（東京都板橋区）と和光市駅（埼玉県和光市）の間に急な昇り勾配がある。勾配は和光市駅の次の朝霞駅付近でピークになり、そこからは川越市方面に向かって平地となる。

朝霞市は平成29年3月、市制施行50周年の節目を迎えた（市制施行は昭和42年3月）。また前年の平成28年4月には、2020年東京

オリンピック・パラリンピック（以下、2020東京）の競技会場（ライフル射撃、クレー射撃）として朝霞市および和光市・新座市・東京都練馬区にまたがる陸上自衛隊朝霞駐屯地（朝霞訓練場）が選ばれたのを機に、「オリンピック・パラリンピック準備室」を設置している。

朝霞市ではこうした慶事を契機に《むさしのフロントあさか》というキャッチフレーズを創出するとともに、積極的なシティ・プロモーションを開始した。

《むさしのフロント》とは、都心部方面から見た場合に、朝霞市が武蔵野台地のへりに位置していることから、武蔵野台地の「入口（フロント）」と呼ぶことにしたものです。

こうした地理的特徴を踏まえながら、『都心部へのアクセスが良いのに、武蔵野のみずみずしい風景や自然環境が保たれているまち』という意味合いを込めて作ったのが、《むさしのフロントあさか》です

とみおかかつのり
富岡勝則
朝霞市長

そう語る富岡勝則。朝霞市長は、生まれも育ちも朝霞市。朝霞市役所職員の出身だ。平成17年

に朝霞市長に就任後は、期を重ねて現在4期目。武蔵野の面影が色濃く残っていた時代の朝霞に生まれ、朝霞の発展とともに育ち、市職員としてだけでなく、その後の市議時代などを含め、絶えず朝霞市政にかかわってきた。

朝霞市最大のイベント朝霞市民まつり『彩夏祭』（昭和59年〜）は、富岡市長が職員時代に担当係長としてリニューアル（経緯は



市民の一体感を醸成してきた「彩夏祭」

後述)を手掛けたもので、2020東京においても当然、市長として重要な役割を果たすことになる。

「私は朝霞市が市制施行した昭和42年3月に、市内の小学校を卒業しました。その3年前の昭和39年に開催された1964年東京オリンピック(以下、1964



市南東部から見た荒川低地

東京)でも、2020東京と同様、朝霞駐屯地は射撃競技(ライフル)の会場でした。しかも1964東京のマラソンで銅メダルを獲得した田谷幸吉選手は、今も朝霞駐屯地内にいる自衛隊体育学校の所属だったんです。

1964東京の地元での盛り上がりは、今も昨日のこのようによく覚えており、それだけに2020東京への期待は大きいですし、朝霞市の総力を挙げて、大いに盛り上げていきたいと考えています(富岡市長)

関東平野西部に位置し、荒川と多摩川に挟まれた面積700km²の台地をなす武蔵野台地は、東京都区部の西半分、立川市、福生市、青梅市などの市域の一部、所沢市など埼玉県の入間地域や朝霞市、志木市、和光市、新座



市制施行から50年間の朝霞市の特質をあえ

人口減少時代に向けた 次の50年への旅立ち

市を含む。そして川越市が武蔵野台地の北端とされるのに対し、朝霞市の荒川低地に面する高低差40mの市域は、さしずめ武蔵野台地の北東部のへりといえるだろう。

この《むさしのフロント》の地で行われつつある積極的なシティ・プロモーションと、市民がずっと「暮らしつづけたいまち」の構築に向けた取り組みが、今回のルポの主要テーマである。



朝霞市の春を象徴する「黒目川花まつり」

て一言で要約すれば、「ずっと人口が増え続けてきたまち」ということができる。

「朝霞市の市制施行時（昭和42年）の人口は約5万6000人。当時はまさに高度経済成長時代の真っただ中で、都心からも近く、県都・さいたま市（当時は浦和市）にも隣接する立地条件の良さなどからベッドタウンとして発展し、市制施行50周年の時点では13万7000人超にまで拡大しました。特に昭和48年にJR武蔵野線・北朝霞駅が開業してか



武蔵野の面影を残す重要文化財「旧高橋家住宅」

らは人口が急増しました。時には増加現象が横ばいに近い状態になったり、子どもの人口増が鈍化した時期もありましたが、朝霞市では総じて、市制施行以来、宅地開発や学校施設の拡充などの対応に追われ続けてきたといえます。

そうした人口が増大する中、新たに市民となった人々とのコミュニティと相互理解を深めることなどを目的に、『朝霞市民まつり』が昭和59年、市民の発案で立ち上げられます。これは当初、花火大会と盆踊りをメインにした素朴なお祭りで、それはそれでもちろん味わいのあるイベントだったので

すが、人口はその後も増え続けていきました。また朝霞台駅と北朝霞駅との乗り換え乗降客が急増するなど、交流人口も増えてきました。

そこで『朝霞市民まつり』を、大きくなった朝霞市を構成するすべての人々の心を一つにまとめられるような、市を挙げたイベントにしようという機運が生まれ、平成7年、本州で初となる鳴子踊り『関八州よさこいフェスタ』を組み込んだ、現在の『彩夏祭』へと衣替えしたので（富岡市長）

朝霞市のまちづくりの基本理念はニュアンスの違いこそあれ、旧来「市民がつくり、育てるまち」に置かれてきた。人口が50年間で2倍以上に急増するのと歩調を合わせるように、市民の心を一つにまとめるために市民が発案した素朴な『朝霞市民まつり』も、今や開催3日間で観客動員数70万人を数える『彩夏祭』へと急成長した。

今年3月まで開催された市制施行50周年の記念事業は、市制施行当日となる昨年3月15日に、朝霞市の名の由来となった東京ゴルフ倶楽部名誉会長、朝香宮鳩彦王のお孫さんにあたる朝香誠彦さん企画のコンサートなどを開催したほか、朝霞市の各課が所管する事業（イベント）数だけでも30以上に及び、2020東京の前景気を兼ねたかのような盛大なものになった。

そして記念事業が今年3月に終了した時点で、『むさしのフロントあさか』のキャッ

朝霞市

市 政 ル ボ

(埼玉県)



北朝霞駅前で開催される朝霞市の新人気イベント「北朝霞どんぶり王選手権」(2月)

チフリーズは、その後も継続するシティ・プロモーションへと活用される。平成28年に本格的に始まった朝霞市のシティ・プロモーションは、2020東京を次のマイルストーンとし、さらに深化されつつ実施されていくのだ。

かといって、朝霞市における一連のシティ・プロモーション事業は、もちろん、単に市制施行50周年や2020東京に関連付けた「お祭り騒ぎ」だけを目的にしているわけではない。

「朝霞市では平成27年度に『第5次朝霞市総合計画』のほか、『朝霞市人口ビジョン』と『朝霞市まち・ひと・しごと創生総合戦略』

MUSASHINO FRONT ASAKA プロモーションムービー公開!



「おかえり」

「ただいま」

市のイメージを映像にしたプロモーションムービー(ドラマ編)「OKAERI」

を策定しました。人口ビジョンによれば、本市では今後も10年ほどは人口が緩やかに増え続け、そこからは減少に転じると推計しています。環境面も含めた総合的な意味での立地条件の良さなどによって、人口を増やし続けてきた朝霞市にとって、これは初めて経験する時代の到来を意味します。これからは市民がより暮らしやすいまちを、よりシビアに選ぶ時代になるともいえるわけで、そういう意味合いからも、朝霞市の暮らしやすさをプロモーションしていくことは重要です(富岡市長)

家族愛のシンボル 「OKAERI」お帰り

人口ビジョンを策定するに当たって平成27年に人口動態を改めて調査した結果、朝霞市では人口をずっと増やし続けている反面、近年は15〜24歳の年齢階級が転入超過、0〜9歳と30〜44歳の年齢階級で転出超過になっているとの「傾向」が強いとの結果が出た。

「それはつまり、進学や就職を契機に多くの方が本市に転入してくるものの、その方たちはその後、結婚や子どもの誕生、子どもの就学前後に世帯ごと転出していくケースが多いという傾向を示していると考えられます。

端的な言い方をしますと、もちろん新たに定住してくださる方も少なくないわけですが、本市に転入してくる働き盛りの世代は結婚するまでか、結婚後の何年かを本市内の賃貸住宅などで暮らした後、よそのまちに家を建てて、出ていかれているということ(富岡市長)

ここ数年の人口動態を見ても、朝霞市には毎年1万人近い数の転入者がいる。人口規模数万人の自治体から見たら「人口移動」とでもいえるような多さだが、それでも人口が微増に止まっているのは、転出者もそれだけ多いからだ。「暮らしつづけたいまち」としての「暮らしやすさ」をアピールするシティ・プロモーションは、朝霞市にとって非常に重要な事業

といえる。

朝霞市シティ・プロモーションの取り組みは「朝霞市の魅力の発信」が基盤となる。これまで述べてきたように、1年間以上にわたる市制施行50周年記念事業の実施は、魅力発信の大きな契機となった。2020東京についても同様だが、朝霞市は県内で唯一パラリンピック競技大会の会場(射撃)ともなることから、「今後はこれまで以上に、障害や国籍を超えた、心のバリアフリーによる共生社会の実現を目指し、外国人も含めたすべての人が相互に支え合えるまちづくりを目指したい」と富岡市長は語る。

それは2020東京の後も続く朝霞市の「暮らしつづけたいまち」づくりのバックボーンでもある。具体的には平成28年度にスタートした「朝霞市第5次総合計画」の基本概念(コンセプト)である「安全・安心なまち」「子育てがしやすいまち」「つながりのある元気なまち」「自然・環境に恵まれたまち」の推進ということになる。

それらの詳細な施策の数々を逐一ご報告する紙幅の余裕はないが、朝霞市のシティ・プロモーションに懸ける熱意と、「私が暮らしつづけたいまち」をアピールしようとする本気度は、各種の広報活動の成果などからも分かる。

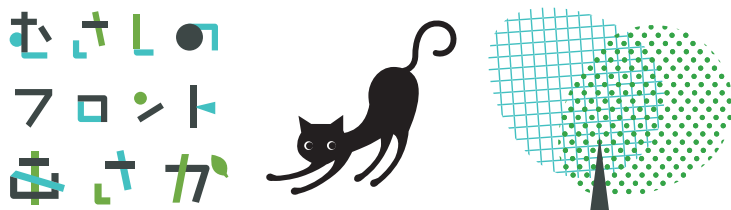
例えば市制施行50周年を記念して制作したドラマ仕立ての広報映像「OKAERI」は、「平成30年全国広報コンクール埼玉県審査」に

において映像部門の特選を受けた。「OKAERI」は家族がさまざまな困難や葛藤に直面するたびに、互いの考え方の違いを理解し合い、何が

あっても「お帰り」と迎えてくれる家族の優しさ、ありがたさ、その家族をはぐくんでくれる地域との交流などを描いたショートドラマ集だ。この「OKAERI」お帰り」というフレーズこそは、朝霞市が目指す「私が暮らしつづけたいまち」の根幹をなすキーワードだと思われる。

シティ・プロモーションに向けた 静かな闘志

ユニークなのは《朝霞市役所 あさぐる!》の愛称を持つ、職員の自主活動グループ「あさかの未来を考える職員ワーキンググループ」の活動だ。《あさぐる!》は「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の取り組みの一環として生まれたグループで、関係団体との意見交換などを通して培われた「若手職員の発想と



市のロゴマーク(左)とシンボルマーク(のびねこ)(中)と(けやき)(右)



朝霞市ブランドブックとぼぼたんグッズ

行動力を生かした活動」をモットーにしている。ちなみに《あさぐる!》は「朝霞の魅力を探る」を縮めたもので、子育て世代にアピールするような情報をフェイスブックで発信したり、市制施行50周年を機に誕生した朝霞市のキャラクター《ぼぼたん》をモチーフにしたカードを作ってイベントに出場したり、そのほかさまざまな情報発信活動を、業務の合間を縫って神出鬼没に活動を展開している。

また《むさしのフロントあさか》をアピールする冊子に『朝霞市ブランドブック』がある。タイトルだけを率直に読めば朝霞市の特産品や文化財などの紹介記事が掲載され

朝霞市

市 政 ル ポ

(埼玉県)



丸沼芸術の森を拠点とするアーティスト・入江明日香さん(上)と河明求さん(下)

ているのかと思われるところだが、これはブランド製品の紹介冊子ではない。朝霞市が制作したシティ・プロモーション用のシンボルマーク(のびをするネコ、けやき)やロゴマーク(むさしのフロント関連)をテーマにした、ブランディング(イメージとしての表象)ブックなのだ。

朝霧の中を川で泳ぐ鴨、四季折々のさりげない景観、生活に密着したちよつといい風景、忙しそうに電車を乗り換える通勤・通学の人々、学校で遊び学ぶ子どもたちのスナックプッシュット、若いお母さんと赤ちゃんとのほほえましい日常、名産のニンジンを取獲している農家の人の笑顔……などなど。それらの美しい写真がシンボルマーク、ロゴマークとともにレイアウトされているだけで、一つの写真に対する細かな説明の言葉はない。そして富岡市長の次のような言葉で締め括ら

れている。「鳥たちが森へ帰るように、小魚が水草に抱かれて眠るように、まちにも、人やさしく包み込む懐が必要です。(中略)むさしのフロントあさか。太古からの、その魅力を受け継ぎ、市民の皆さまとともに、輝きのあるまちづくりを推進してまいります」

『朝霞市ブランドブック』は、こうしたブランディングイメージを共有し、シンボルマークやロゴマークとともに朝霞市のPRを展開してくれる企業などへの呼び掛け(使用料は無料)を目的にしている。

朝霞市にはまた、文化的土壌を連携しながらはぐくんできた『丸沼芸術の森』という素晴らしい民間アート施設がある。若い芸術家たちに制作の場を提供することを目的に設立されたこの施設では市のキャラクター「ぽぼたん」の作者でもある陶芸家・河明求さんや、独自の技法と

世界観による作品で注目を集める版画家・入江明日香さんなど、幅広いジャンルの作家12名が制作活動を行っている。

『丸沼芸術の森』と朝霞市は「地域文化の振興でも深い連携



市民参加でアート作品を創り鑑賞し販売もする「アートマルシェ」(10月)

を結び、市制施行50周年記念事業などにも積極的に参画していただいていた関係(富岡市長)にある。『朝霞市ブランドブック』の「暮らしやすさ」や「帰ってくる場所(お帰り!)」のイメージを静かに訴求する姿勢のアートの雰囲気は、まさにそうした朝霞市の文化的土壌を物語っている。同時に初めて迎える人口減少時代に向けた、朝霞市シティ・プロモーションの秘めたる『静かな闘志』が感じられるのだ。(取材・文 遠藤隆 / 取材日 平成30年2月20日)